

令和 3 年 6 月 29 日現在

機関番号：42408

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02099

研究課題名(和文) 昭和初期のラジオによる都市上層・新中間層の母親像形成に関する研究

研究課題名(英文) A Study of the Formation of Mothers' Images in the Upper-Middle Class in Cities by Radio in the Early Showa Period

研究代表者

野村 和 (NOMURA, Nagomi)

武蔵野短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：70435238

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、昭和初期にラジオを通して都市部の上層・新中間層の中に形成された母親像とその過程でラジオが果たした役割を明らかにすることを目的とした。具体的には、ラジオの女性向け番組の内容の分析から、ラジオが創出した母親像を検討した。

結果としてラジオに表出した母親像として「子供の教育に熱心な母親像」、「近代科学的な視点で生活を捉え直す母親像」、「西洋文化の普及による生活様式の変化に肯定的な母親像」の3点を、こうした母親像が形成された社会的背景とともに明らかにした。さらに、女学校教育との継続性を検討に加えることで、成人女性にとってのラジオの教育的意義を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、母親像を検討する資料としてラジオを用い、これまで扱われてこなかったラジオ番組内容の検討を行ったことで、近代女性史やメディア史に新たな視点を示したことに意義がある。また、ラジオ聴取者が都市部上層・新中間層に限定されており、分析対象を限定することで、この階層に属した母親たちに求められた特有の意識や生き方をより実証的に明らかにした点に学術的意義を有する。

本研究はまた、ラジオ番組の女性啓蒙の役割の検討を女学校教育との継続性と発展性に着目し、生涯教育における学校教育の重要性を明らかにした点で社会的意義を有するものである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the images formed in the upper-middle class in cities by radio in the Showa period, and the role of radio in that process. Specifically, I examined the image of mothers from analysis of the contents of radio programs for women.

As a result, the images of mothers appearing on the radio are following three points. These are, "mothers who are enthusiastic about their children's education", "mothers who reconsider their lives from a modern scientific perspective", and "positive for changes in lifestyle due to the spread of Western culture". I clarified these by examining the social background. Furthermore, by adding the continuity with girls' school education to the examination, I pointed out the educational significance of radio for women.

研究分野：生涯教育学

キーワード：近代女性像 ラジオ番組 母親像 育児

1. 研究開始当初の背景

近代女性史分野の先行研究では、明治大正期に女性が近代国家の国民として統合されていく過程が明らかにされており、その資料として婦人雑誌などの紙媒体のメディアを扱った研究が蓄積されている。しかし、家庭に入った初めての音声伝達メディアであるラジオはこれまで扱われてこなかった。

日本放送協会発行の『ラジオ年鑑』によれば、ラジオは放送開始時より女性を重要な聴取者と捉えていた。「婦人向け番組」と区分される番組を、教養番組の項目でほぼ毎日放送している。1933年には教養番組は全番組回数の35%を占め、そのうち14.6%が女性向け番組である。また、1日の全放送時間7時間のうち、1時間を女性向け番組に費やしていることから、ラジオが当時の女性向けメディアとして一定の役割を担っていたといえる。

研究代表者はラジオ放送に関しては本研究申請以前に、女性向け番組と位置づけられる「家庭講座」、「婦人講座」、および「家庭大学講座」の3番組について1925年から1933年の放送題目をデータ化し、分析を行った。その結果として、「家庭講座」は、裁縫と料理を中心とした「家政」そして「育児」、「趣味」を中心とした実用的な内容、「婦人講座」は時事問題や政治、国際情勢などを扱う啓発的な内容、「家庭大学講座」は10回以上の体系的なカリキュラムをもつ学術的な内容を放送していることを明らかにした。しかし放送題目の分析のみでは、多様な情報を女性向けに発信するメディアであるとの結論に留まっている。ラジオの女性への影響を明らかにするためには、放送内容の質的な検討が不可欠であると考えた。

当時、ラジオで女性向け番組を聴取していたのは20代から30代前半の女性であったことも、これまでの検討から明らかになっている。乳幼児や就学児童を家庭内に抱える若い主婦たちが、主たる聴取者であり、また当時高価であったラジオ受信機の購入と聴取料の支払いが可能な富裕層に聴取者が限定されることを考えると、ラジオの女性向け番組とは、都市上層及び新中間層の若い母親に向けて発信されていたことになる。対象が限定されているため、近代において成立した新中間層を含む、高い社会階層に属した女性たちに求められた意識や生き方を明確にするためにラジオは、より広い層に普及していた紙媒体のメディアよりも有効な資料となると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、昭和初期にラジオを通して都市部の上層・新中間層の中に形成された母親像とその過程でラジオが果たした役割を明らかにすることを目的とする。ラジオ放送が開始された1925年から日本放送協会が組織改編された1933年までの女性向け番組「家庭講座」「婦人講座」「家庭大学講座」の内容分析を中心とする。放送題目の分析から3番組の特徴はすでに明らかになっている。

本研究ではこれまでの量的分析を土台としながら、「育児」関連の番組に着目し資料に基づいて放送内容を質的に明らかにする。そしてラジオプログラムと時代的背景との関連性を検討し、近代においてラジオ放送が創出した都市上層・新中間層の母親像と家庭に入った初の音声メディアであるラジオの女性啓蒙のための役割を明らかにしようとするものである。

3. 研究の方法

本研究では、すでに明らかになっている放送題目の「家庭講座」の育児関連番組をさらに「科学分野」(小児医療や衛生)、「教育分野」(子供の生活やしつけ)、「家政分野」(幼児服作成など)の3分野に分類して、それぞれの分野の比率と内容の特徴について検討を行った。内容の検討には、資料として主に『東京朝日新聞』のラジオ欄と入手可能なラジオテキストを用いて、放送内容の明確化に努めた。

さらに、高等女学校での教育内容と放送内容との相違性を問題とするために、1910-30年に出版された高等女学校の「家事」及び「家政」の教科書を資料として用いた。

4. 研究成果

(1) 育児関連番組の内容

育児関連番組を番組題目より分類すると、「教育分野」に該当する番組が最も多く全体の68%にもものぼることがわかった。次に「科学分野」に関するものが18%、6%が家政に関するものであり、その他分類できないものが8%となった。この結果からは当時の母親に対して特に「教育する母親像」が強く求められていたことが明確となった。

(2) 教育する母親像について

「家庭講座」の育児関連番組の中で「教育分野」に分類した番組題目の一覧が以下の表1である。胎教から中等教育段階の子供との関わりまでがとりあげられていることがわかる。特に、中等教育に関する項目が多いことに驚く。聴取者層の女性たちは、当時高等女学校を卒業した層と重なるが、高等女学校では家庭での教育に関しては「教育」という科目があった。1,901年の「高等女学校令施行規則」において「教育ニ関スル普通ノ知識ヲ得シメ家庭教育ニ資スルヲ以テ要旨

トス」とされ、「教育ノ理論ノ大要ヲ授クヘシ」と定められている。1903年の「高等女学校教授要目」をみると、「教育」科では「心ノ状態」と「教育」という大項目が挙げられ、「教育」は「家庭教育、児童身体ノ養護、遊戯及手技、説話、命令賞罰、幼稚園保育其ノ方法、学校教育、教授、訓練、家庭教育ト学校教育、家庭教育ト国家」となっており、特に幼児期の教育に特化した家庭教育について教えられていた。

表 1: 育児関連番組中の「教育」に関わる題目

年度	題目
1925	不良少年と発生と教育・オモチャと教育・胎教のお話・子供の礼儀作法・子女の教育について・現代生活と子供の教育
1926	ラジオと家庭教育・何歳位から子供に音楽を教えたらよいか・家庭における市民教育・童話の教育的意義・家庭教育に就て・新たに児童を学校へ送るお母様方へ・先生と親心・新学期に際して母親へ・中学入学者への注意・中等教育時代の子女に対する母親の理解・家庭の力・児童芸術提唱の意義・子供の叱り方・家庭における子女の芸術教育・母を脅かす子供の読物・育児の一節・子供のもつ三つの・幼児の生活・令嬢を有たるお母さまへ・少年の職業指導に就て・家庭と学校と少年団・入学前の児童をもつ御家族へ・子供の遊びと母の注意・少年の不良化に就て・童話舞踊について・母の力・林間学校へ子供を送る注意・育児法・いろいろの子・修学旅行と遠足について家庭の心得べき事・子供の智能の導き方と身体の発育・乳児の被服に就て・母性愛・児童の徳性かん養について・継子に対する誤れる同情
1927	入学難について御母様方へ・童話を通じての家庭教育・我子のほめ方・青年期の女子を持つ父母へ・新学期を迎える家庭へ・裁縫教育の現状とその将来について・米国の学校および家庭教育を視て・家庭教育上子供に与える本のお話・入学試験廃止案について・家庭における児童の国語生活の指導・童話を選ぶ母親へ・児童と文房具・児童の交通安全に関する十戒・幼稚園へ愛児を送らんとする御家庭へ・通学児童を持つ父兄の方々へ・児童遊園の話・児童から生れた玩具・子を持つ親のために・童話家の見たるこどもの心・子供の智育と体育およびその将来の職業・児童と活動写真・林間学校について・児童の臨海生活について・新生児(初生児)の取扱方・愛児のために・及第の母さん・落第の母さん・保母としての保育上の感想・育児茶談・母親が子供に聴かせるクリスマス童話
1928	教育者としての母・間近くなりたる入学試験について・不良少年について・愛児と共に学べ・子供のしつけ方について・かうすれば優等生になれる・家庭の芸術教育としての児童舞踊・童謡と家庭教育の実際・父の誕生日に愛児に聞せる母の童話・新入学児童の保護者方へ・少年保護について・暑中休暇と都会児童の田園生活・良い子の育て方・子供の悪いせのお話・母の慈愛とその感化力・子供の心持を理解せよ・児童読み物の選び方と与へ方
1929	中学生のしつけ方・児童を通じて見たる家庭教育・乳児と幼児の取扱ひ方(養護)としつけ方(教育)・子供の心の育て方・子供の心の育て方・子供の教育・家庭における宗教教育・音楽と舞踊・玩具の選び方と与え方・幼児の教育・幼児の美育・子供を幸福になす法・子供を持たるる若き母親のために・幼少児童の日記の記入事項とその効果・乳幼児の子守について・子供の生活・育児に関する色々な注意・赤ちゃんの着物その他・児童の愛護と生活の改善・母の体験から・子供の言葉・家庭におけるおはなし・絵本絵雑誌の選択・子供の服装について・児童保護事業の実際・子守うたについて

(資料:「NHK 番組確定表」及び『東京朝日新聞』「ラジオ番組表」より作成)

ラジオにおいても乳幼児期の子育てについての番組は多いが、同時に入学試験も含めた中等教育以上の教育にまで広げて、母親の教育者としての役割を求めていることが特徴であるといえる。

ラジオ聴取者である新中間層の母親にとって「子どもの教育」が重大な関心事となっていた要因としてまず、この時期に多産多死型社会からの転換があったことがあげられる。当時産児制

限運動が展開され、この運動を積極的に支持したのが新中間層の女性たちであった。また、この層の女性たちは高等女学校への進学者が多く初婚年齢が上がったことも出生率が下がった原因として考えられる。医療技術の発展により死産や乳児死亡率も減っており、少産少死型の社会が誕生していった。第2に、特に新中間層の家族においては性別役割分業が定着し、子供の教育は母親の役割であるという意識が広まったことである。近代における女子教育の理念として良妻賢母主義があげられるが、家を守る妻としての役割の中で女性には家庭の管理能力が問われ、「男は仕事、女は家事育児」という家庭概念の中で、教育の担い手としての母親の役割が重要視されていった。¹第3に、私有の生活手段をもたない俸給生活者を中心とする新中間層の母親にとって、子供の将来のために高い学歴をつけさせることが良い就職につながる唯一の道となっていた点である。明治年間に整備された教育システムにより上級学校への接続が明確になり、帝国大学を頂点とする学校の格付けができると学歴が社会的な保証となっていく。当時の婦人雑誌にも「中等学校へ愛児を受験させるお母様の心得」²、「入学試験に必ず合格する準備の仕方」³など母親向けに書かれた受験準備の記事がある。

このような時代背景の中で、子供の教育役割を担う母親の役割が強くラジオ番組に反映されていたことがわかる。

(2)「家庭講座」の母親像に見られる近代科学的な視点

育児関連番組の内容を精査する中で特徴として指摘できるのは、その近代科学的視点である。特に医療や衛生、育児に関する「科学分野」に分類した番組ではその内容が確認できた。例えば、栄養学では1914年に栄養(栄養)研究所が開設され、1917年に理化学研究所が設立されるなど、栄養学の研究施設が大正時代に次々と整備されている。栄養学の発達に伴い、1920年以降に新しい栄養素としてビタミンの呼称が一般化しており、またカロリーという熱量の単位やその概念が普及したのも、この頃である。そして1929年放送の「幼児の栄養(講師は竹野芳次郎)」の回のテキストにはカロリー及びビタミンについて以下のような説明がみられる。「普通エネルギーはカロリー(熱量)で表はすのであります……一カロリーとは、一リートの水を摂氏一度だけたかめるために要する熱量であつて、食物の栄養価を単位であります。今蛋白質一グラムを燃やすと、四・一カロリー、含水炭素同じく四・一カロリー、脂肪は九・三カロリーの熱を出します。つまりそれだけの栄養価をもつてあるのであります」⁴また、別の個所では「栄養素とは蛋白質、脂肪、含水炭素、水、礦物質の五種をいひますが、其他栄養素ではないが、これがなくては栄養素の効を全うすることができない物質があります。それが即ちビタミンである。このビタミンを補助栄養素といふて居ますが、ビタミンにはA、B、Cとあつて最近D、Eと発見され、なほ続々と発見せられるやうであります」⁵と記載がある。

さらに医学の分野では、1889年に結核療養所が設立され、同年北里柴三郎が破傷風菌の純粋培養に成功している。1897年には志賀潔が赤痢菌を発見するなど近代に入って世界的な発見も含めて、目覚ましい進歩が見られた。こうした医学の発展の中でラジオにおける医学的内容でも、新たな知見を聴取者に伝えようという意識がみられる。「児童衛生としての結核予防(講師は佐藤正)」のテキストには、以下のような記述がみられる。「医学進歩に伴つて、結核の予防に對する観方や考へ方が、近年非常に變つて来ました。その中でも小兒の結核に就ては、著しい進歩が促され、予防上の実行は、先づ小兒の時代から始められねばならぬと唱へられるやうになりました。……本放送に於て私は、小兒衛生を中心としての結核予防の最新智識に触れてお話ししたいと思ひます」⁶。その上で、テキストには1927年における調査統計を掲載しており、放送が医学的内容であったことがうかがえる。

(3)母親に発信された新たな生活様式

「家政分野」に分類された番組内容は、西洋料理やイス式設備、洋風作用を取り上げるなど、洋風化を意識した放送が多くみられることが特徴的だ。また、洋装、洋式住宅、西洋料理などが日常生活に浸透していたとは言えない中で、洋風を意識した内容は、ラジオ聴取者の高い社会的階層を示すともいえるが、実用性のみではなく、新しい生活の様式に関する知識として放送されたとも考えられる。この傾向が顕著なのは、「裁縫」に関する放送である。当時の高等女学校では和裁中心のカリキュラムであったのに対して、「家庭講座」の放送内容では、和裁と洋裁の放送回数の割合に偏りが少なくなっている。高等女学校の教授要目では大正末期以前には、「裁縫」を学ぶといえば和裁であり、洋裁を学習する場合は限られていた。しかし、「家庭講座」が放送を開始した1925年は洋裁ブームで、新聞にも、洋裁塾や洋裁学校の広告が盛んに出された時期であった。また大正期に入ると洋服は、活動に便利であり、生活の簡易化、能率化に役立つものとして実用性・必要性がたかまっていた。大正末期から昭和前期には高等女学校でも、割烹の実習に西洋料理を取り上げたり、裁縫にミシンを使用するところが現れたりするなど、学校生活でも、家庭生活でも西洋文化の受容が進められていった。このような変化する生活に対応し、学びたいと考える女性のニーズにこたえるなかで、近代的価値観や意識を母親に持たせようとしていた可能性があるといえる。

例えば、テキストに「幼児食の調理法」として32のレシピが掲載されているが、その中には当時一般的とはいえない材料が含まれている。バターは冷蔵庫が普及していない時期には保存が難しく、日本での大衆への普及は戦後であったといわれるが、多くのレシピでバターが用いられている。また、小麦引割を「グリッス」、麵類を「ヌーデル(又はスパーゲッツと云う)」と記載

するなど単語も新しい洋風雰囲気を意識したものが多用されていた。

-
- 1 小山静子『良妻賢母という規範』、勁草書房、1991年・『子どもたちの近代 学校教育と家庭教育』吉川弘文館、2002年や沢山美果子『近代家族と子育て』吉川弘文館、2013年、などの先行研究で、新中間層が形成した近代家族とその子ども観が言及されている。
 - 2 櫻井ミキ子「中等学校へ愛児を受験させるお母様の心得」、『主婦之友』第19巻第2号、1935年、330-337頁。
 - 3 加藤普佐次郎「入学試験に必ず合格する準備の仕方」、『主婦之友』第19巻第2号、1935年、254-260頁
 - 4 日本放送協会関東支部『家庭講座「我子の為に」(青葉の巻)』、北隆館、1929年、103-104頁。
 - 5 同上書、108頁。
 - 6 同上書、208頁。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 野村和	4. 巻 1
2. 論文標題 昭和初期のラジオによる母親像形成に関する研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 武蔵野短期大学研究紀要第34輯	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野村和	4. 巻 32
2. 論文標題 ラジオが提供した育児関連番組に関する考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 武蔵野短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 野村和
2. 発表標題 昭和初期のラジオ放送が形成した女性像
3. 学会等名 日本社会教育学会
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 野村和
2. 発表標題 女学校の教育課程とラジオプログラムの継続性に関する考察
3. 学会等名 武蔵野保育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野村和
2. 発表標題 ラジオ『家庭講座』が形成する母親像の検討
3. 学会等名 武蔵野保育研究会
4. 発表年 2017年～2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------